

# 家庭と国語の教科書がもつ家族情報(2)

## —— 親と子どもの役割 ——

大 瀧 ミドリ\*

(平成6年4月28日受理)

### 要 旨

小学校の家庭と国語の教科書に描かれている親と子の役割について分析し、以下の結果を得た。

1. 国語の教科書に描かれる父親と母親の役割は、家庭の教科書に比較して伝統的な性別役割観に基づいた記述になっている。
2. 子どもに関する記述においても親の役割と同様に国語の教科書の方が、女子を男子よりも受動的な生き方をするように描いている。
3. 国語の教科書に描かれる親と子どもの関係は、家庭の教科書に比較して保護するものと保護されるものというような固定した関係の記述が多く、親と子どもの関係は、対等・平等な関係として描かれていない。

### KEY WORDS

home economics textbook	家庭の教科書	Japanese textbook	国語の教科書
father's role	父親の役割	mother's role	母親の役割
child's role	子どもの役割	parent-child relationship	親子関係

### 1 はじめに

第1報では、家庭と国語の教科書がもつ家族の属性に関する家族情報について見た。本報告では、親と子どもの役割に関する家族情報について見る。家族構成員は、それぞれの個人としての生活と共に、家族や家族以外の人との生活を合わせてもつ中で、多様な役割を担って生活している。それゆえ、親の役割に関する家族情報として、親が親の役割を生きる姿だけを子どもに呈示するのではなく、親にとって親の役割は、多様な役割の1つに過ぎないことが分かるようなモデルが教科書を介して呈示される必要があろう。子どもについても同様に子どもとしての役割だけでなく、個人としての生活モデルが示される必要があろう。また、批准の手続きが進められている子どもの権利条約<sup>1)</sup>では、子どもは基本的な人権を享有し、かつ、行使する主体とみなされており、子どもが権利を行使できるようにサポートすることが親や国の役割とされ、親と子どもは人間として対等・平等な存在であることが明示されている。子どもの価値観の形成に大きな影響を与える教科書に描かれている親と子どもの関係についてもこのような視

---

\* 生活・健康系教育講座

点が確保されている必要がある。

そこで、本報告では家族の生活を主テーマとする家庭の教科書と家族が登場する頻度の高い国語の教科書に描かれている親と子どもに関する記述などから親と子どもが担っている役割の多重性および親と子どもの関係の描かれ方について検討する。

## 2 方 法

### (1) 対象

第1報<sup>2)</sup>と同じく、1989年に小学校5・6学年で使用されていた家庭の教科書4冊と1～6学年で使用されていた国語の教科書72冊に描かれた親と子どもに関する記述等を分析対象とする。なお、祖父母に関する記述は、今回は分析対象としない。家庭の教科書には、親と子どもの役割について言及している記述および挿絵と写真等に親と子どもが登場する場面が総計36箇所あったが、同一家族が複数の箇所に描かれているため、実際の家族数は30家族である。家庭の教科書で分析対象とした親と子どもの人数は、父親27名、母親30名、男子37名、女子27名、計121名である。なお、親と子どもが登場する生活場面は、食事や団欒の場面が約47%、家事の場面が約17%、その他の場面が約36%となっている。また、国語の教科書で分析対象とした親と子どもの人数は、父親186名(含、人以外16名)、母親271名(含、人以外45名)、男子246名(含、人以外11名)、女子193名(含、人以外3名)の計896名(含、人以外75名)である。

### (2) 分析方法

国語の教科書に記述されている親と子どもの役割に関する記述等から、以下の項目を役割チェック項目として設定する。

親の役割チェック項目 : 親(4項目)、出生順位(2項目)、各種サービスの授受(3項目)、家計維持(2項目)、関係調整(4項目)、夫婦(2項目)、性的存在(2項目)、個人生活(1項目)、家族以外の人々との関係(2項目)

子どもの役割チェック項目 : 出生順位(4項目)、各種サービスの授受(3項目)、家計維持(2項目)、関係調整(3項目)、性的存在(2項目)、個人生活(1項目)、家族以外の人々との関係(2項目)

親と子どもの役割分析では、上記のチェック項目をダミー変数として扱い、項目に関する記述の有無についてチェックする。「お父さん」「お母さん」というような呼称のみが記述されている場合も、呼称自体が被呼称者が担っている役割を明示しているためチェックの対象とする。なお、家庭の教科書の分析は、国語の教科書について親と子どもに関する役割チェック項目で有意な性差が認められた項目のみについて分析し、全項目についての分析は行わない。また、国語の教科書では、人間と人以外の家族の親と子どもが登場しているが、両家族の役割の記述に有意差がないため、本報告では一括して分析を行うこととする。基本的な分析手続きは、第1報と同様である。

## 3 結果と考察

## (1) 親について

国語の教科書に描かれている父親について役割の多重性を見ると、一人の父親が担っている役割は、1から9種類の間分布し、平均2.9種類 (SD=1.57) の役割をもって描かれている。また、母親の場合は、1から7種類の間分布し、平均2.7種類 (SD=1.26) の役割をもって描かれている。父親と母親の役割の平均多重性には有意差はなく、その平均値はいずれも低い値となっている。父親と母親の担う役割を見たのが表1である。

表1 国語の教科書に描かれた父親と母親の役割 N (%)

	父 親	母 親	有意差
親			
父親・母親	183 (98.4)	269 (99.3)	
社会化の担い手	43 (23.1)	85 (31.4)	†
子育て	45 (24.2)	64 (23.6)	
出生順位			
継承者	9 ( 4.8)	6 ( 2.2)	
子	1 ( 0.5)	0 ( 0.0)	
各種サービスの授受			
サービスの与え手	27 (14.5)	131 (48.3)	**
サービスの受け手	21 (11.3)	17 ( 6.3)	†
サービスの補助者	8 ( 4.3)	1 ( 0.4)	**
家計維持			
主たる稼ぎ手	34 (18.3)	16 ( 5.9)	**
従たる稼ぎ手	1 ( 0.5)	9 ( 3.3)	*
関係調整			
家族の拠り所	23 (12.4)	42 (15.5)	
家族の統率者	27 (14.5)	4 ( 1.4)	**
気持ちの代弁者	12 ( 6.5)	18 ( 6.6)	
権威の体现者	11 ( 5.9)	4 ( 0.4)	**
夫婦			
夫・妻	14 ( 7.5)	7 ( 2.2)	*
性			
男性・女性	6 ( 3.2)	2 ( 0.8)	†
個人			
個人生活	11 ( 5.9)	7 ( 2.2)	
家族以外の人々との関係			
職業人	50 (26.9)	22 ( 8.1)	**
社会人	24 (12.9)	17 ( 6.3)	*
対象者	186	271	

† p&lt;.1 \* p&lt;.05 \*\* p&lt;.01

父親の場合は、父親>職業人・社会化の担い手・子育て>前記以外の役割、というように記述のされ方に有意差が認められる。母親の場合も、母親>サービスの与え手>社会化の担い手・子育て>家庭の拠り所>前記以外の役割、と有意差がある。なお、ここでいう「父親」及び「母親」役割とは、「お父さん」「お母さん」などの呼称のみの記述を意味する。

国語の教科書では父親には「職業人」としての役割が、母親には「サービスの与え手」としての役割が強調されており、親の役割については伝統的な性別役割観を助長するような記述になっている。また、第1報で指摘したように、家族構成員の呼称には、ほとんどの場合に親子関係やきょうだい関係を示す呼称が使用されており、夫婦関係やその人個人を示す呼称が使用されることは少ない。本来、複数の役割を担って生活している家族の構成員の関係が、親子関係を示す呼称を他の関係にも代替させるという家族における呼称の固定化は、親が担っている多様な役割の中の親役割だけを肥大化させる結果を来す主要な要因であることが示唆される。

父親と母親の間に有意差が見られた役割は、表1に示す通りである。父親の方に多く見られる役割は、家計維持、家族の統率者や権威の体現者、夫、社会人、職業人である。つまり、父親は、家庭において母親よりもリーダー的役割を担い、より広い人間関係の中で生活しているように描かれている。一方、母親の方に多く見られる役割は、家族に対するサービスの与え手としての役割であり、父親に比較して母親の生活空間は狭く、生活の場が家庭に限定された記述となっている。このような記述から読み手である子どもは、父親と母親の役割を性別に対応させて理解する可能性が指摘される。

家庭の教科書でも、母親はサービスの与え手として描かれる傾向(33.3%)が見られるが、父親(14.8%)の記述との間には有意差はない。しかし、個々の描き方について見た場合には、複数の家族が描かれている状況で母親のみが食事の準備をしている挿絵があったり、家族の生活時間調べの題材に例示<sup>3)</sup>されている共働きの家庭の母親の会社等に拘束される時間が、父親よりも2時間半程短く、速く帰宅する母親が家事を担うように描かれている。父親と母親の役割を性別に対応させて記述している程度は、家庭の教科書の方が国語の教科書よりも少ないものの、家庭の教科書に描かれる父親と母親の役割に関する情報によって、国語の教科書を介して示される伝統的な性別役割観が払拭されるとは言い難い。

女性が仕事と家事の両方を抱え込まされている状況を肯定するような情報が教科書を介して子どもに呈示されることによって、現実の生活場面における性別役割観の問題点に気付くことよりも、むしろ、生活場面における伝統的な性別役割観を強化する危険性が指摘される。女子差別撤廃条約では「男女に対する固定的な役割にもとづいた偏見・習慣およびその他のあらゆる慣行の撤廃(第5条)」「教育のあらゆる段階と形態における男女の役割についての定型化された概念を除去する(第10条)」「両親が家庭の責務と職業上の責任および公的活動への参加とを両立させる(第11条)」ことが規定されていることを考慮するならば、子どもには、両親が家庭の責務と職業上の責任や公的活動への参加とを両立させているような情報が積極的に呈示される必要がある。

## (2) 子どもについて

国語の教科書に描かれている男子の役割の多重性を見ると、一人の男子が担っている役割は、1から8種類の間に分布し、平均2.9種類(SD=1.31)であり、女子の場合は、1から10種類の間に分布し、平均3.0種類(SD=1.40)であり、両者に有意差はない。男子と女子の担う役割に

表2 国語の教科書に描かれた子どもの役割 N (%)

	男子	女子	有意差
出生順位			
きょうだい	139 ( 56.5)	99 ( 51.3)	
孫	20 ( 8.1)	27 ( 14.0)	*
継承者	4 ( 1.6)	3 ( 1.6)	
子	2 ( 0.8)	2 ( 1.0)	
各種サービスの授受			
サービスの受け手	74 ( 30.1)	79 ( 40.9)	*
家事の補助者	51 ( 20.7)	35 ( 18.1)	
サービスの与え手	28 ( 11.4)	12 ( 6.2)	†
家計維持			
従たる稼ぎ手	9 ( 3.7)	3 ( 1.6)	
主たる稼ぎ手	5 ( 2.0)	3 ( 1.6)	
関係調整			
指示者	15 ( 6.1)	16 ( 8.3)	
家族の拠り所	10 ( 4.1)	11 ( 5.7)	
気持ちの代弁者	7 ( 2.8)	12 ( 6.2)	
性			
男の子・女の子	246 (100.0)	193 (100.0)	
個人			
個人生活	26 ( 10.6)	17 ( 8.8)	
家族以外の人々との関係			
社会人	53 ( 21.5)	38 ( 19.7)	
学生・生徒	28 ( 11.4)	31 ( 16.1)	
対象	246	193	

† p&lt;.1 \* p&lt;.05

ついて見たのが表2である。

表2に見られるように、男子と女子のいずれの記述においても、きょうだいとサービスの受け手の役割が高い比率を占めている。特に、「サービスの受け手」としての役割が強調されていることから、子ども親として保護的受動的な子ども像の存在が示唆される。なお、有意な性差が認められた役割は、孫、サービスの受け手であり、いずれも女子の方に多く見られる記述である。国語の教科書では女子の方が男子よりも受動的な描き方になっている。親の記述に比較すれば子どもに関する記述は、伝統的な性別役割観に則った記述は少ないものの、子どもに関する記述においても親の記述の場合と同じような性別役割観を肯定する情報になっている。

次に国語の教科書で男女差が見られた、孫、サービスの受け手に関する記述が、家庭の教科書ではどの様になっているかを見る。祖父母と同席している男子(50.0%)と女子(56.7%)の間には有意差はなく、孫の記述に関しては有意な性差はない。また、サービスの受け手についても、男子(13.2%)と女子(20.0%)の間に有意差はない。親の記述とは異なり、家庭の教科書に描かれる子どもの役割には性に基づく伝統的な役割記述が認められず、国語の教科書に比較すれば性別役割観を強調するような記述は見られない。しかし、教科書の読み手である子どもの立場にたった場合、国語の教科書は1年次から接し、かつ、その授業時間は家庭の時

間に比較して極端に多く、また、登場人物の心情的理解を重視する国語の教科としての特徴を考慮するならば、伝統的な性別役割観を反映している親の役割に関する記述が、男子と女子の役割に関する意識にも大きな影響を与える可能性が懸念される。つまり、国語の教科書の性別役割を肯定する記述自体は、子どもが経験している日常生活から必ずしも逸脱している訳ではない。それゆえ、日常的に子どもがもっている性別役割意識が教科書によって強化される可能性だけでなく、国語の教科書を介して伝統的な性別役割意識が拡大再生産される危険性も指摘される。

### (3) 親と子どもの役割の比較

国語の教科書に記述されている親と子どもの役割に有意差のあるものを示したのが、表3である。

子どもは、サービスの補助者・サービスの受け手・社会人として父親や母親よりも多く記述され、さらに、母親よりも指示者として多く記述されている。父親は、主たる稼ぎ手・統率者・家庭の拠り所として子どもよりも多く記述され、さらに、男子よりも指示者として、女子よりもサービスの与え手として多く記述されている。母親は、サービスの与え手・主たる稼ぎ手・統率者・家族の拠り所として子どもよりも多く記述され、さらに、男子よりも気持ちの代弁者として多く記述されている。

この結果は、親はサービスの与え手と情緒の安定を図る役割が与えられ、子どもにはサービスの受け手と情緒の安定を図られる役割が与えられていることを示している。つまり、親と子どもを保護するものと保護されるものとして、対称的な役割を与えた描き方になっている。勿論、子どもは保護される存在ではあるが、同時に子どもも人として大人と等しい人権をもち、人権を行使する主体的な存在であることを考えれば、子どもの保護される面が強調され過ぎることは、人としての対等・平等性を軽視することにもなりやすい。

表3 有意差が見られた親と子どもの役割

	父 親		母	
	男子	女子	男子	女子
継承者	B<F †	G<F †		
サービスの与え手		G<F **	B<M **	G<M **
サービスの受け手	B>F **	G>F **	B>M **	G>M **
サービスの補助者	B>F **	G>F **	B>M **	G>M **
主たる稼ぎ手	B<F **	G<F **	B<M *	G<M *
従たる稼ぎ手	B>F *			
家族の拠り所	B<F **	G<F *	B<M **	G<M **
統率者(指示者)	B<F **		B>M **	G>M **
気持ちの代弁者	B<F †		B<M *	
個人生活	B>F †		B>M **	G>M **
社会人	B>F *	G>F †	B>M **	G>M **

F=父親, M=母親, B=男子, G=女子

† p<.1 \* p<0.05 \*\* p<.01

次に、家庭の教科書に描かれている親子間のサービスの授受の関係について見る。受け手としても、与え手としても、父親と子どもおよび母親と子どもの間に有意差はない。また、おやつ作りの題材では、「憩い」の場造りに子どもが積極的に関わる記述になっている。これは、家族構成員間の役割の代替を示す題材であり、このような役割の代替が、家族構成員間で日常化されることによって親子関係における対等・平等性を促すことが期待される。

#### 4 おわりに

国語の教科書の情報は、家庭の教科書の家族情報に比較すると伝統的な性別役割を肯定するような情報になっている。しかし、家庭の教科書に描かれる親と子どもの役割と関係について、子どもの権利条約に保障されているように子どもと親が個人として尊重され、人間として対等・平等な関係を結ぶために有効な情報となるためには、次に示す点について改善される必要がある。

例えば、家庭における仕事の分担は、家族としての生活の享有と個人としての生活の充実に図るためになされるという、二つの意義をもっている。家庭の教科書では、家庭における仕事の分担の意義を、発達の意義および家族としての責任意識の育成<sup>4)</sup>、家庭生活のゆとりと和やかさの醸成<sup>5)</sup>におき、家族としての生活を共有する面が重視されている。そのため、時間調べの題材<sup>6)</sup>では「勉強や仕事の時間は、自由時間と比べてじゅうぶんだろうか」という問がなされ、個人の生活における時間配分を見直すようになってきている。家族の一人ひとりの生活が保障されるためには、子ども自身と子ども以外の家族構成員の生活時間のバランスにも目が向けられる必要があるだろう。つまり、親にとっても子どもにとっても、その人らしさを育てるために大切な個人の生活を相互に保障し合うような視点からの見直しも同時にされる必要がある。個人のための時間が、それぞれに保障されている関係は、親と子どもの間に対等・平等な関係を築くための重要な要件の1つとなろう。

また、「分担の仕方は家庭によって違いがある<sup>7)</sup>」や「家族は、仕事や学校その他で、それぞれがった生活をしている<sup>8)</sup>」など、家庭生活の個別性や役割の多重性に関する記述があるにもかかわらず、子ども自身の生活を見直すために、友人や全国の平均値と比較する方法が取られている<sup>9)</sup>このような学習方法は、かって、平均値としての身体計測値が、発達の固体差を軽視する問題を内含していたのと同じ問題を生み出す危険性がある。むしろ、先に指摘した生活の共有と個人としての生活とのバランスという視点から生活の見直しを進める方が、家庭の個別性を認めることになろう。人の生活は、日時や健康状態等によって異なることを考慮すれば、役割の代替えが可能な状態にあることが、生活の共有と個人としての生活の確保の必要条件となろう。その意味からは、家庭の仕事の分担が、日常的に代替可能な状況を含んでいる必要があるだろう。

さらに、個人の生活時間は、社会的に管理されている部分が多い。それゆえ、問題の解決を家族構成員間での調整にのみ置くこと無く、むしろ、社会的に管理されている現実を目に向け、社会的視点からの調整の必要性に気付くような情報が与えられる必要がある。そのことによって、子ども自身が生活に主体的に関わることが可能となろう。親と子どもが、対等・平等な関係を結ぶためには、家族に対する社会的支援は必須の条件である。そのためには、家族の

生活と社会の関係をハードの面<sup>10)</sup>のみで無く、制度等のソフトの面における関係づけも必要となろう。

## 文 献

- 1) 喜多明人 新時代の子どもの権利—子どもの権利条約と日本の教育— エイデル研究所 1990
- 2) 大瀧ミドリ 家庭と国語の教科書がもつ家族情報(1) 一家族の属性— 上越教育大学紀要第13巻第1号 57-68 1993
- 3) 新しい家庭 6 東京書籍 1989
- 4) 新しい家庭 5 東京書籍 1989
- 5) 小学校家庭科 5 開隆堂 1989
- 6) 小学校家庭科 6 開隆堂 1989
- 7) 前掲書 3
- 8) 前掲書 3
- 9) 斎藤健次郎 小学校家庭科学習指導書 指導事例編 6 開隆堂 1988



# Family Information Analysis Found in Textbooks on Home Economics and Japanese (2)

— Parent's and Children's Roles —

Midori OTAKI\*

## ABSTRACT

The research was carried out on elementary textbooks on home economics and Japanese to find out what kinds of family images are presented. By analyzing how parent and children roles are described in these textbooks, the following conclusions were formed :

1. The father's role and the mother's role in Japanese textbooks are described as being more traditional than in home economics textbooks.
2. It is more obvious in Japanese textbooks than in home economics textbooks that girls have more passive lives than boys.
3. There are more Japanese textbooks than home economics textbooks that portray the parent-child relationship as one of protector-protected, respectively ; thus it is not an equal relationship.

---

\* Division of Physical Education, Home Economics and Technology Education :  
Department of Home Economics Education